新岡垣風土記 第442回

ミャンマー（ビルマ）と岡垣⑥

岡垣歴史文化研究会　入江　東樹

〈ビルマ戦から生還できた2人の兵士〉

町内糠塚の入江茂美さん（故人、ビルマで戦死した筆者の叔父と山田小学校の同期生）は、ビルマ戦に出征された。

筆者は、茂美さんが生前中にビルマ戦のことを聞いていたが、体験記を書かれていたので、その一部を紹介する。

「昭和19（1944）年5月27日、門司港から出征した。目的地は、ビルマだった。船団は、50隻だった。船室は足の踏み場のないぐらいのぎゅうぎゅう詰めだった。

1カ月後、シンガポールに着いた。その後、タイからタイメン鉄道で、ビルマのモールメンに着いた。

そこから汽車で北上し、マンダレー（旧都）を経由し、さらに自動車で、中国の雲南省に入った。8月初旬だった。

私は龍師団の第113聯隊第五中隊所属で、擲弾筒（小型の追撃砲）担当の一員だった。拉孟陣地に向かった。前方の山にいる中国軍との距離が、約400メートルぐらいだった。

中国軍が怒河を越えて、日本軍の守備地域に侵入してきた。

8月下旬、拉孟陣地を引き上げ、芒市に着いた。その後、私たち部隊の約100名は、龍陵に向かった。

我が隊で行動できるのは、夜間のみだった。

我が隊に機関銃分隊が配属されてきたが、その分隊長は、私と同じ糠塚の石松廣義さんだった。

龍陵（中国雲南省）は、盆地である。そこの雲竜寺に着いた。

同9月8日、中国陣地に突撃を開始した。しかし、銃撃され、25人くらい戦死し、その後も戦死者が続いた。我が隊の隊員数は、わずか13名になった。

同月15日、ここで、拉孟と騰越の守備隊が全滅したことを聞いた。

次の日、他の陣地の救出作戦に出た。でも、中国軍の銃撃がひどく、その1発が我が隊の擲弾筒の銃眼に当たり、私は足をやられた。3カ所から出血した。弾の破片が刺さっていた。自分で抜き取った。だが、足が立たず、担架で運ばれ、トラックに乗せられて、ワンチンの野戦病院に着いた。

さらに後方に送られた。傷口に蛆が湧き、痛い。足は細くなっていった。マラリアにも罹った。そこから、ラシオの病院に送られた。

1945年になって、戦況はさらに悪化し、マンダレーへの待避命令が出た。

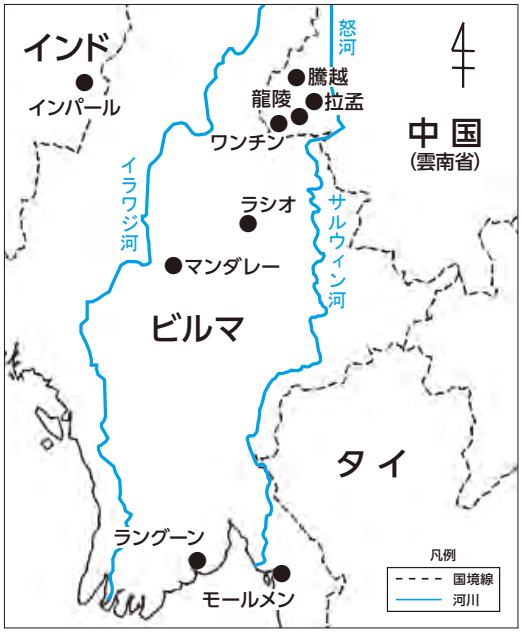
同年8月、終戦になった。船で怒河を渡り、タイに入り、捕虜収容所に入った。

翌年5月、帰国命令が出た。タイのバンコクから、船で日本に向かった。神奈川県の浦賀に上陸し、福岡へ向かった。

後年、龍師団の戦場の1つだった龍陵地区の白塔小学校建設のため、戦友会で寄付されることを聞いた。自分も寄付をした。

戦争のことを考えてみたい。なぜ雲南省やインパールまで、戦場を拡げたのか。ビルマでの戦況不利を顧みず、『人は石垣、人は城』で兵を増強し、全滅までさせたのか。これが戦争かと思う」

と述べている。前記の石松廣義さんも、終戦後に生還できた。廣義さんの長男の照美さんは「父は首から鼻にかけて、中国軍の銃弾が貫通する銃傷を受けていたのに、よく生きて帰れたと思う。だが、父はビルマ戦のことは余り語らなかった」という。

廣義さんの弟2人も出征され、ビルマ以外の戦地で戦死された。

つづく